

14

芭蕉翁句碑の前にたたずむ

今、南御堂・難波別院の門をくぐり、左奥の枯山水の庭園にある句碑「旅に病て」の前の句が「かけめぐる」に

ゆめは枯野をかけまはるの前に立っている。あれ！なっていないことに気付いた。難波別院からいたいたい。難波別院からいたいたい。たパンフレットを見ると、



南御堂  
難波別院



にて、学生俳句といわれるジャンルで毎月投句したものだった。生活俳句などが持てはやされていたが、自然耽美の姿勢は崩さず、吟行にはよく同行したものである。当時は苦吟だったが、

思う。日本語は世界に誇れる美しい言葉である。ことば遊びから文化、文学まで昇華させた第一人者は芭蕉だと思っている。その翁が元禄7(1694)年10月12日に、大阪のこの難波別院の前の花屋さんの奥座敷で亡くなる4日前、句碑の「旅に病て——」を詠んだのである。

同時にこの「浄土」に江戸時代当時の真宗の権威がかがえたように思う。大樹と芭蕉の葉陰のもとで、しばし文学青年にタイムスリップしたひと時であった。

文学青年にタイムスリップ

門人により解釈が分かれていた。今年に殊の外いつまでも日差しが強い。木陰で休むことにした。

私は大学時代の4年間、俳句をつくる機会に恵まれた。水原秋桜子の「馬酔木」も短い17文字のポエムだと

今振り返ると貴重な経験をしたと思っている。言葉や文章を表現する技術を身につけたように思う。

俳句はモノやコトへの感嘆詞・詩であり、世界で最

い、芭蕉翁の辞世の句と違って。木陰の涼風に誘われてパンフレットを更に読み続けると、芭蕉研究者らしい説明があった。

「この句は辞世の句ではない。芭蕉は日ごろから句をよむときは一句一句を辞世と考えていた。芭蕉翁行状記で臨終の折一句なしと門人の路通は述べて居られる。芭蕉はたえず死を思っていたので、積極人生であった。枯野は地獄ではなく、

御堂筋  
の  
かたまり